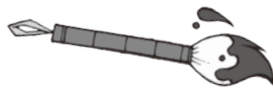


新・下野市風土記

お盆と外出を戒める行



下野市教育委員会 文化財課

県をまたぐ外出を控えているうちに梅雨を迎え、新しい生活様式の中で熱中症にならないようマスクの着用を工夫している間に、お盆の時期になってしまいました。例年ならば、京都八坂神社の祇園祭を契機に全国各地で関連末社の夏祭りが行われ、著名な花火大会や京都大文字焼（五山の送り火）のニュースが流れて、夏の終わりを感ずっていたことでしょう。

お盆といえば、現代日本人にとって、お正月と並ぶ大切な年中行事です。一体どうして亡くなった人の魂を迎えることが一大行事になったのか、今回は、その成り立ちをご紹介します。

お盆の由来

お盆は、元々は「盂蘭盆会」といい、『仏説盂蘭盆経』という経文が原点のようです。

「仏説」とは、「ブツダがお話になったこと」を意味します。そして、この『仏説盂蘭盆経』は、ブツダの十大弟子のひとり、目連の両親について語っています。

目連には、他の誰よりも不思議な力があり、神通力で死後の世界を見ることができました。

あるとき、彼が亡き両親の行く末を見たところ、父親は天上界に生まれ変わっていましたが、母親は餓鬼道に墮ちて鬼に生まれ変わり、見るに堪えない飢えと苦しみの中におかれています。目連は、神通力を使って自分の食事をお経と共に母に届け、食べてもらおうとしましたが、母が食べようとすると食べ物はあつという間に燃え上がり、食べることができません。

そこで、目連はブツダに救いを求めました。ブツダは、「たった1人の力では地獄や餓鬼となった亡者を救うことはできない。7月15日に僧侶たちの百日行が明けるので、彼らに食事を施しなさい。食事を受けた大勢の僧侶たちは、皆で協力して説経をしてくれるだろう。その大勢の力が、必ず亡き人々を救ってくれることであろう」と教えを授けました。

目連が教えのとおり、大勢の僧にご飯や果物、香油、敷物、寝具などを施したところ、母や、母と同じように苦しんでいた餓鬼たちは菩薩の姿となって天上界に昇っていったというのが、『仏説盂蘭盆経』のあらすじです。

※「盂蘭盆」の語源は、インドサンスクリット語「ウラバンナ」の音訳で、逆さ吊りという意味です。目連の母が餓鬼道で逆さ吊りにされ、苦しんでいたことを示しています。

現代も続く風習

目連の施しによって地獄の扉が開いたとき、亡者たちは苦しみから逃れ、菩薩に姿を変えて昇天していきました。

その歓喜する姿が、両手を挙げてまるで踊っているようで、大勢で手を挙げて踊る＝盆踊りの原型となったという説もあります。地方によっては、現代でも、数日にわたって昼夜を問わず踊り続ける風習が引き継がれています。

盆踊りを踊る、あるいは迎え盆という亡くなった人をお迎えする時間が夕方なのは、亡者や餓鬼は地中に居ると考えられているためです。地中の亡者は明るい光が苦手なので、暗くなつてから彼らを迎えるのです。

ロウソクではなくホオズキを灯明として供養の棚に供える習慣も、ホオズキを「鬼灯」と書くのも、このためです。

命を守る昔々の“ステイホーム”

『仏説盂蘭盆経』の中で僧侶たちが行っていた「百日行」は、遊行（外で行う修行）を止め、外出せずにこもって行う修行のことです。「雨安居」や「夏安居」とも呼ばれます。

安居は元々、雨季を意味するインドサンスクリット語からきています。雨期には草木が繁り、昆虫や小動物が活発に行動するため、遊行で踏みつけて無用な殺生をしてしまわないよう、外出を避けたのが本来の目的です。

例年5月19日に奈良唐招提寺で行われる「うちわまき」という行事も、修行中に蚊に刺された僧が、むやみに蚊を叩き潰さないように不殺生を戒め、代わりにうちわで払ったことに由来しています。この日、配られるうちわには、病魔退散や厄除けのご利益があるとされています。